

大学3年時に小田原中継所で
(八尾あす香さん提供)▶



フィニッシュテープを持ちながら泣きそうに…

「駅伝チームの皆さん、ありがとう」

学生アスリートのひのき舞台を支えた関東学連の学生役員、八尾あす香さん(商4)



八尾あす香さん

兵庫・雲雀丘学園高校卒、商学部4年。中学、高校と6年間、硬式テニス部に所属。関東学連の学生役員になったのは、読売新聞社と関東学連が運営するサイトで紹介されている、箱根駅伝を支える学生の思いを記したコラム「駅伝ひろば」を読んだことがきっかけだった。中大卒業後は福祉関係の仕事に就く予定。陸上競技の審判員の資格を取得しており、将来にわたって箱根駅伝をはじめとする大会運営に携わりたいと考えているという。

フィニッシュテープを持ってリハーサル
(八尾あす香さん提供)△

箱根駅伝の最終10区、中大の井上大輝主将(法4)が総合6位で大手町のゴールに飛び込んだとき、フィニッシュテープを手にしていた一人は同じ中大生だった。関東学生陸上競技連盟の学生役員、八尾あす香さん(商4)がその人。大学時代の4年間、箱根駅伝をはじめとする、さまざまな陸上競技大会の運営、準備に携わり、学生アスリートが活躍するひのき舞台を陰で支え続けた。

「シード権を取ってくれて、フィニッシュテープを持ちながら泣きそうになりました。駅伝チームの皆さんにありがとうと伝えたい」

一番近くで目にしたシード獲得の瞬間をそう振り返った八尾さん。駅伝チームに直接かかわることはなかったものの、中大のユニフォームを着て、走る姿を見るだけで元気をもらえた。「学生役員として皆のためにも良い大会にしようと頑張りました」と感謝する。

「何かあれば私のミス」 小田原中継所で重責担う

箱根駅伝の開催当日は4年間とも、4区から5区、6区から7区へとランナーが襷をつなぐ小田原中継所(神奈川県小田原市)の業務に就いた。とくに3、4年時は中継所の総括(主任)を務め、「何かあれば私のミス」という重責を担った。

ナンバーカード(ゼッケン)を忘れた選手への対応や、出走直前なのに姿が見えない選手を拡声器で声を張り上げて探し回ったり、襷をつないで倒れ込んだ選手を搬送する救急車を手配したりと、「胃が痛くなるような経験」も少なくなかった。

このほか、コースを管轄する警察署、中継所や待機スペースを提供してくれる企業、芦ノ湖畔の関係者、鉄道会社、バス会社と

の打ち合わせも大切な業務。開催当日は交通規制や走路員への指示なども任せられた。

選手全員が7区に襷をつなぐと、小田原中継所の学生役員は例年、新幹線を使ってゴールの大手町に向かい、業務を手伝う。フィニッシュテープを持つ“大役”は八尾さんが務めることになった。

「1秒でも速く」 襷つなぐ選手に心打たれる

強豪校の硬式テニス部で活動していた中学3年のとき、大事な試合で負けて全国大会への連続出場が途切れ、心に大きな穴が開いた。部活を辞めようかと悩んでいたが、もう一度頑張ろうと思わせてくれたのが、テレビで見た箱根駅伝のランナーの姿だった。

チームのために1秒でも速く襷をつなぐとする姿に心打たれた。それまで陸上競技とは無縁だったが、将来は箱根を走る選手のために何かをしたいと思うようになった。

中大には、「スポーツ・健康科学」の分野で、駅伝チームにモチベーションビデオを提供するプログラムに取り組む村井剛・法学部准教授のFLPゼミの存在を知って進学し、2~4年時に村井ゼミに所属した。

モチベーションビデオは、レース映像やプライベート映像などを編集して、選手た

ちがレースに向けて気持ちや意識を高められるようにと鼓舞する内容。実際に練習風景の撮影も行ったという。

「箱根駅伝にかかわりたい」と学生役員になったが、1年生で最初に業務に携わったのは関東インカレだった。大きな規模の大会を学生主体で運営していることに圧倒された。トラック・フィールド種目を間近で見て、「駅伝以外も面白い」と感じた。

箱根開催を発表した後、「コロナ禍なのに開催するのか」というクレームの電話を受け取ることが多かったが、こんな経験もした。たまたま八尾さんが受けた電話で、病気を患っているという高齢の男性から、「次の大会が見られるかは分からない。開催してくれてありがとう」と言葉をかけられた。温かい言葉に勇気づけられた。

常に心掛けていたのは、感謝の気持ちを忘れないということ。さまざまな大会は、支えてくれる大勢の人たちがいてこそ開催できる。活動の支えになったのは、役員同期の7人の4年生の存在だ。全員の大学が異なり、役員にならなければ知り合えなかった仲間が、互いを励まし合ってきた。

「学生役員を務めて、普通の学生生活ではなかなか得られない経験ができました。4年間のすべてが私の財産です」。卒業の日を迎えた八尾さんは静かにそう話している。

☆関東学生陸上競技連盟の学生役員

さまざまな陸上競技の大会運営を支える学生役員は、幹事長、副幹事長、会計、常任幹事、幹事の計35人(2021年度)。業務はエントリー受け付けや出場資格の審査、大会で使用する備品の確保、会計業務、各地の陸上競技協会に依頼して審判員を募ったり、プログラムを作成したりと多岐にわたる。八尾さんは3、4年時に会計責任者の重責を担った。

駅伝ひろばは
こちらから
読むことができます





卒業おめでとう

学生記者卒業記念コラム



たくさんの人に出会い、 支えられた4年間 学生記者としての 経験も大きな刺激に



学生記者

石井伊落 (法4)

授業が終わり、生協前で手に取った『HAKUMON Chuo』を読んでいて「学生記者募集中!」という文字が目飛び込んできた。文章を書くことが好きだった私は、率直に面白そうだと興味を持った。その日の授業は2限で終わり、予定もなかったのでせっかくだから話を聞いてみよう、私の足取りは広報室のある多摩キャンパス1号館へと向かっていた。

そして私は本当に、その日に学生記者となった。記者活動の面白さについて嬉々として語る編集長の顔、新しいことが始まることへの高揚感、話を聞きながら飲んだ食堂の温かいコーヒー、窓一面に広がるキャンパス内の美しい紅葉。今でもその日のことをはっきり覚えている。実際に学生記者は自分にとってプラスになる経験だった。取材を通し、今まで見たことがない世界を見ることができた。自分の目で見て、耳で聞いたことを自分の言葉で伝えることは楽しかった。本号では箱根駅伝を走った3人の選手に取材を行った。自分にとって大きな刺激となり、学生生活最後の記者活動として満足のいく取材を行うことができた。

宣伝になってしまうが『HAKUMON Chuo』は引き続き学生記者を募集している。少しでも興味を持った方はぜひ気兼ねなく応募してみしてほしい。



合気道サークルで たくさんの思い出

そして私の大学生生活を語るのに外せないのがサークル活動で、「中央大学スポーツ合気道クラブ」に所属していた。とても単純だが、友人に誘われて行った見学で先輩が優しくしたこと、大学では今までやったことがないことをやってみたくと思ったことが入ったきっかけだ。

合気道サークルに入ったことでたくさんの人に出会い、支えられ、そして思い出がいっぱいできた。飲み込みの遅い私に対して、先輩や同輩が時間を割いて練習に付き合ってくれた。試合中、自分の名前を呼んで応援してくれる声が聞こえたときは、ものすごくうれしかった。たくさん練習したにもかかわらず緊張で頭が真っ白になり、演武で技を忘れかけて情けない思いをしたことがあった。合宿先から台風で帰れなくなる思わぬハプニングもあった。ここには書ききれないほど、たくさんの出会った人と思いが私の胸には詰まっている。

コロナ禍になってからは練習ができなくなってしまったが、このサークルのおかげで充実した大学生活を送ることができた。心の底からこのサークルに入って良かった、合気道を始めて良かったと思っている。

中央大学で過ごした日々を振り返ると、周りの人に恵まれた4年間だった。大学に通わせてくれた両親や大学生活で出会った人たちには感謝をしてもきれない。卒業して4月からは晴れて新社会人となる。春からもたくさんの人との出会いを大切にしていきたい。

“二刀流”をかなえた中大OG、 駅伝予選会、ドラフト会議… 学生記者の活動で 多くの出会い



学生記者

齋藤優衣 (総合政策4)

私は大学1年生の頃から、「HAKUMON Chuo」の学生記者として活動をしている。この活動に興味を持ったのは、もともと新聞記者になりたいと考えていたためだ。入学した頃、私は漠然とマスメディア業界を志望していて、記事を執筆できる点に魅力を感じて活動への参加を希望した。

しかし、授業や先輩の話の聞いたり、インターンシップに参加したりする中で、公務員として国の政策に携わりたいという気持ちが大きくなり、結果的に方向転換した。それでも4年生までずっと活動を続けてきたのは、この記者活動を通して出会える人から非常に大きな刺激をもらえるからである。

大学1年のときは、大学院卒業後にIT企業で働く傍ら、プロのダーツ選手としても活躍する中大OGを取材した。当時、私は上京して間もなく、多摩キャンパスから取材場所の後楽園キャンパスまで移動するのに電車の乗り換えに失敗して遅刻するという苦い思い出が残っている(申し訳ありませんでした)。取材では、まさしく“二刀流”をかなえ、仕事にスポーツにと意欲的に取り組む女性の姿に非常に刺激を受けた。

2年の秋には、箱根駅伝の予選会を取材した。駅伝ファンだった私にとって、現場で、しかも選手に直接取材



できるというのは本当にうれしかった。陸上競技部の関係者や応援団、OB、OGらが一堂に集まり、順位発表の緊張の瞬間を見守る。本戦出場校として大学名が読み上げられたときの大歓声に鳥肌が立った。選手のほっとした表情をみて、スポーツの厳しさも心から実感した。

3年生では、コロナ禍の影響を受けた学生生活や就職活動の様子について執筆した。新しくスタートした国際教育寮の1期生としても活動していたため、その当時の困難について書いたところ、友人や先輩から反響があった。互いの近況を知ることが難しくなった環境の中で、自分の思いを発信して、つながりが生まれたことがうれしかった。

4年生の秋は、プロ野球ドラフト会議の取材を担当した。選手にとって人生の岐路となる重要な瞬間である。同じ4年生ということもあって、ハラハラしながら取材会場にいたことを覚えている。無事に指名を受け、笑顔で質問に答えてくれた選手の生き生きとした顔が忘れられない。私も新しい環境で頑張ろうと刺激を受けた。中央大学は、さまざまな分野で活躍しているたくさんの学生がいる。私はこれらの取材を通して、キャリアの多様性を知り、チームで喜びを分かち合う瞬間、自分の夢に向かって努力を続けるパワーに出会うことができた。

こうした「出会い」は確実に自分の生き方に良い影響を及ぼしていると感じる。自分自身の大学生活のほかにも、異なる環境や目標に向かってチャレンジしている人を知り、刺激を受けたいと考えている人には、ぜひお勧めしたい活動である。

最後に、執筆にあたりお世話になった北村編集長、久保田前編集長、大学広報室の皆様にご挨拶申し上げます。ありがとうございました！



『ザ・プロレスラー』 になる!

「気持ちが高ぶりました」。初めてリング上で挨拶した安齊勇馬選手＝2022年1月2日、東京・後楽園ホール

全日本プロレスに入団 憧れのリングで活躍誓う

レスリング部 安齊勇馬選手(文4)

レスリング部の安齊勇馬選手(文4)が卒業後、憧れだったプロレスの世界に飛び込む。レスリング部で培ったすべてを糧に、プロレスラーとして飛躍を目指す。当初は練習生として体力づくりなどに励み、四角いリングでのデビュー戦は2022年中にもと期待されている。将来の目標は全日本プロレスの至宝「三冠ヘビー級」のチャンピオンベルト奪取だ。

「男くさいレスラーに」

「大きい体の『ザ・プロレスラー』になりたいです」

多摩キャンパス第一体育館のレスリング道場で2月に取材した安齊選手は、この春から荒々しいプロの格闘技の世界に足を踏み込むとは思えない柔らかな表情、落ち着いた口調

でそう話した。

「プロレスは見るからに痛いだろうなと思える技の応酬で、普通の人には到底できない世界。見ていて熱くなれるのがプロレスです」。こんどは自身がリングに上がり、会場の観衆を熱くする戦いの当事者となる。「飛んだり跳ねたり」という空中殺法よりも、水平チョップなどの力技

で勝負する「男くさいレスラー」を目指したいという。

188センチ、105キロのがっしりとした体格と、端正なマスクは、もちろんプロレスラーとしての実力があってこそではあるが、リング上で注目されそうだ。

父親の義宏さんが空手家だったこともあり、小中学校時代は空手や

野球に取り組んだ。中学2年の夏のある日に、たまたまテレビのプロレス中継を見て、「こんなにかっこいい世界があるのか。おれもこの世界へ行きたい」と衝撃を受けた。

コロナ禍が転機 「ピンチをチャンスに」 筋トレで体重大幅増

プロレスラーになるため、「もっと体をたくましく、大きくしたい」と考えていたとき、図らずもコロナ禍が転機となった。大学3年時は半年間、スパーリングなどレスリングの練習が減り、当然公式戦も減った。このため筋力トレーニングを主体に取り組んだところ、90キロ前後だった体重が約15キロも増えた。

ピンチをチャンスに変えたといっ
ていいだろう。「コロナ禍前は、体が
まだ細かったんです。どんなところ
に(自分が)変われるきっかけがあ
るか分からないと思いました。後輩
たちにもこれは知っておいてほし
い」とメッセージを送る。

マット上では負けず嫌い

中大レスリング部では、「耐える
力」「踏ん張る力」「苦しいところか
ら、あと一步頑張る力」を培った。山
本美仁監督や、3年時までトURRE
レベルの技術指導を受けた韓国人
コーチ、切磋琢磨したチームメート
に感謝している。

ふだんは物静かな印象だが、
マット上では負けず嫌いな一面を

見せる。階級(体重)が上の主将、武
藤翔吾選手(法4)とはスパーリン
グを繰り返した仲。安齊選手は「負
けても『もう一丁』と、納得いくまで
挑んでいきました。(4年生になっ
て)少しは追いついたかな」と語り、
自身の成長に手応えを感じている
ようだ。

2022年1月2日には、全日本プロレ
スのリングにスーツ姿で初めて登場
し、「中央大学の安齊勇馬と申しま
す。4月から入門します。よろしく願
いします」と観衆を前に挨拶した。

「これまでは見る立場でしたが、
プロレスラーになるという実感がわ
きました。気持ちが高ぶりました」。
遠くない将来、全日本プロレスの看
板を背負って立つレスラーになるこ
とを期待したい。

▼全日本プロレス入りする安齊勇馬選手=多摩キャンパス第1体育館レスリング道場



「中大スポーツ」新聞部提供

安齊勇馬選手

あんざい・ゆうま。群馬・前橋西高卒、文学部4年。188センチ、105キロ。レスリング歴7年。高校時代はレスリング部のある学校が近くになく、毎朝始発に乗って朝練習に臨んだ。2019年全日本大学グレコローマン選手権5位、2021年東日本学生レスリング選手権春季大会フリースタイル97キロ級優勝。全日本プロレスには中大OBの諏訪魔選手が所属、OBで故人のジャンボ鶴田(鶴田友美)さんも在籍していた。



全日本プロレスのリングに上がり、挨拶する安齊勇馬選手=2022年1月2日、東京・後楽園ホール▲